

第11回日本社会学会奨励賞【著書の部】受賞者「自著を語る」

受賞作：中村英代『摂食障害の語り——〈回復〉の臨床社会学』新曜社、2011

中村 英代

(浦和大学短期大学部介護福祉科特任准教授)

これまで社会学と臨床領域の境界線上で、手さぐりで研究を進めてきましたが、思いがけなく栄誉ある賞をいただきました。本書は、回復者への質的調査に基づいて、摂食障害からの回復過程を考察したものです。

摂食障害は語り尽くされてきました。先行研究にはデータも解釈も適切な研究は山ほどありますし、言説があふれている現代で、意味あることを言える機会はそう多くはないように思います。それでもなお、質的調査という手法を用い、臨床社会学と〈回復〉論という視座を設定することで、新しく見えてきたことが沢山ありました。当事者層の成熟による語り手の登場、構成主義的な心理療法の台頭などいろいろなタイミングが重なった結果です。1冊の本やある考えというものは、時代の流れが生み出すものようです。

日本社会学会ニュース (No. 207) に掲載された選評では、先行研究に関して、「必要な論点は吟味しつつ取り入れていく柔軟な姿勢も特徴的であった」というお言葉をいただきました。この部分は、試行錯誤しつつ執筆を進めた部分でしたので、嬉しく拝読させていただきました。私が初めての単著を執筆しながら経験したことは沢山あります。そのひとつが先行研究の扱い方でした。

相手が見えない状況で、他者への敬意や想像力が失われることはよくあります。偶然ある立場を選んだだけなのに、そこに取り込まれると、別の立場への攻撃が無自覚かつ習慣的になされるようになる場合すらあります。こうして先行研究レビューには、批判や否定の強い言葉があふれかえります。

けれども、私は何かを裁くために社会学に携わっているわけではありません。先行研究は紙とインクの集積ではなく生身の人間の営みです。敬意をもってフェアに接し、そこからきちんと学びたいと思うようになりました。これ以降、先行研究に検討を加える際は、近接領域や社会学の既存研究と、どのような関係性を構築したいのかをよく考えるようになりました。このことに漠然とながらでも気づいてから本書を出版できたことは、本当に幸せなことです。分析の不十分さは後で嘆けば済みます。しかし、先行諸研究を粗雑に扱っていたら、私はそのことで後でひどく傷つくことになったはずで、先行研究とじっくり向き合う機会をくれたのは、編集者の小田亜佐子さんでした。

こうしたスタンスを含め、あとがきでは「闘わない社会学」などを書きましたが、同時に、私は、小さな本のなかで私なりに闘ったのだと思います。私の相手は人間ではなく、集合的なモノでした。権力、制度、規範、言説。言い方はさまざまですが、本書ではストーリーや物語と呼びました。ある種のストーリーは、どこからともなく生まれ、自己増殖し、人々を害していきます。あるストーリーは個人や集団に寄生し、悪意もないままに、人々のリアルな実生活を崩壊させます。被害を訴えたくても、集合的で漠たるものが相手では個人は太刀打ちできません。私自身、いろいろなストーリーに苦しめられながら生きている弱い個人です。本書は、ストーリーが個人に与える作用をいろいろな側面から取り上げた研究として読むこともできそうです。

社会学の素晴らしさは、私たちの生活の隅々にまで浸透しながらも、個人では手に負えない集合的なモノの存在を指摘し、その作用を評価し、時に葬り、新たな物語に光を当てる、そんな力があることだと思います。こんなことができる学問は、そう多くはないのではないのでしょうか。しかしこの力は、何かを根底からひっくり返してしまうような破壊力も含んでおり、具体的な個人や特定の学問領域に差し向けられた場合、大きな痛手を負わせてしまうはずで、ですから、少なくとも自分がどこに向けて何をしようのかについては自覚的でありたい。私は、社会学のこの力をもっと上手に使えるようになりたいと思います。

摂食障害の領域では、女性の身体を取り巻く社会環境や、家族の関わり方などが指摘され続けていますが、本書では、私はジェンダーにも家族にもごくわずかししか触れていません。〈回復〉という課題を扱う際には中心的に取り上げる必然性がなかったためです。それでも両者をずっと意識していました。人生経験の不足やテーマの壮大さのために手を出せなかった側面もあるので、今後、摂食障害を超えたところで取り組んでいきたい課題です。

最後に、選考委員の先生方、推薦して下さった先生、これまでご指導いただいた先生方に心からお礼を述べさせていただきます。摂食障害に関しては、手持ちのデータで言いうる範囲のことを書ききれた満足感があります。ですが、自分自身の物事の見え方や研究方法が、社会的に妥当なものであるかについての確信はもてないままでした。賞をいただいたおかげで、そうした不確かさをいくらか払拭することができたように思います。ありがとうございました。